

アイコイル発生気

電子気功装置「ドラゴン・フォース」

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

大きな特斯拉コイルが、すさまじい勢いで、放電を繰り返す。
その下で、特斯拉が椅子に座って、のんびりと読書をしている。
そんな写真が、残されている。
僕は、最初、それを見たとき、「放電なんか、恐くない！」
と特斯拉が虚勢を張って、平気を装っているのではないか、と思った。
しかし一方で、大の男が、わざわざ、そんなことをするだろうか？
という疑問も湧いてきて、妙な話だと思った。

先日、フリーエネルギー装置を応用した気の発生装置、
「アイコイル発生気」を作って、試していると、
ふと、あれは特斯拉が、特斯拉コイルから発生している“気”を浴びる、
森林浴に似た、「気浴」をやっているのではないか？
という考えが、浮かんできた。
特斯拉が、彼の特斯拉コイルから、色んなものを発見していることは、
確かなようだから、それもあリかな、と思っている。



気功、修験道、武道、ヨガ、瞑想、などをやっている人達の中には、
気のわかる人が、少なからずいる。
気がわかるというのは、「気を物理的実在として、感じ取ることができる」、
ということである。
僕は、何年か前に一時、気の行を熱心にやり、

気が、わかる体質になった。

その後、フリーエネルギーの研究から、その実験中に、
どうかすると、コイルから、気が出ているのを感じ、
いつしか、この現象を応用して、気の発生装置を作ってやろうと、
考えるようになった。

そして、最近になって、これを手がけ、満足のいくものができた。
これによって、「気の発生装置」が確立できたと、自負している。
それと同時に、気の物理学的正体は、何か？
気の発生メカニズムは、どんなものか？
できれば、それも一緒に解明しようと考えた。

●時空ポテンシャル

僕の時空理論では、電磁ポテンシャル A_i を、

物体の世界線(4次元の路)に沿って、線積分した値、

$$\zeta = \int_p^q A_i dx^i \quad (i=1,2,3,4)$$

を時空ポテンシャルと呼んでいる。

時空理論では、物体の質量は、
その物体の時空ポテンシャル値によって決まる。
例えば、電磁ポテンシャル A_i の場の中に、
置かれたり、運動したりする電子は、
その時空ポテンシャルが変化し、その結果、その質量も変化する。

一昔前なら、「電子の質量が変化する」、などと言ったら、
トンデモだと思われただろうが、最近では、それが実際に観測されるらしく、
「重い電子」をネット上で検索すると、京都大学の研究などが出てくる。
たぶんまだ、質量変化のメカニズムは、解明されていないと思うが、
上に述べたように、時空理論なら、この現象を容易に説明できる。

フリーエネルギーの研究を進めるうちに、

フリーエネルギー、気、時空理論
の3つは、領域が極めて近く、部分的に重なることに、気がついた。
この3つとも、電磁ポテンシャル A_i が、重要な役割をする。

実験によれば、
自由電子の時空ポテンシャルが、なるべく大きく変化するように、
回路やコイルによって、Ai を発生させると、
気が、よく発生することがわかった。この経験から、

…気の発生源は、電子の時空ポテンシャルである。

と考えた。

●ヒッグス粒子

さて、一方で、素粒子論に目を向けるならば、
素粒子論では、物体に質量を与えるのは、“ヒッグス粒子”であるという。
また、ヒッグス粒子は、スカラー場であるという。
すでに述べたように、時空理論では、物体に質量を与えるのは、
時空ポテンシャルであり、これもスカラー場(実数)である。
すると、

…時空ポテンシャル=ヒッグス粒子 か？

ということになる。

一方で、気の発生は、電子の時空ポテンシャルからであるから、

…気の発生は、ヒッグス粒子に関係する。

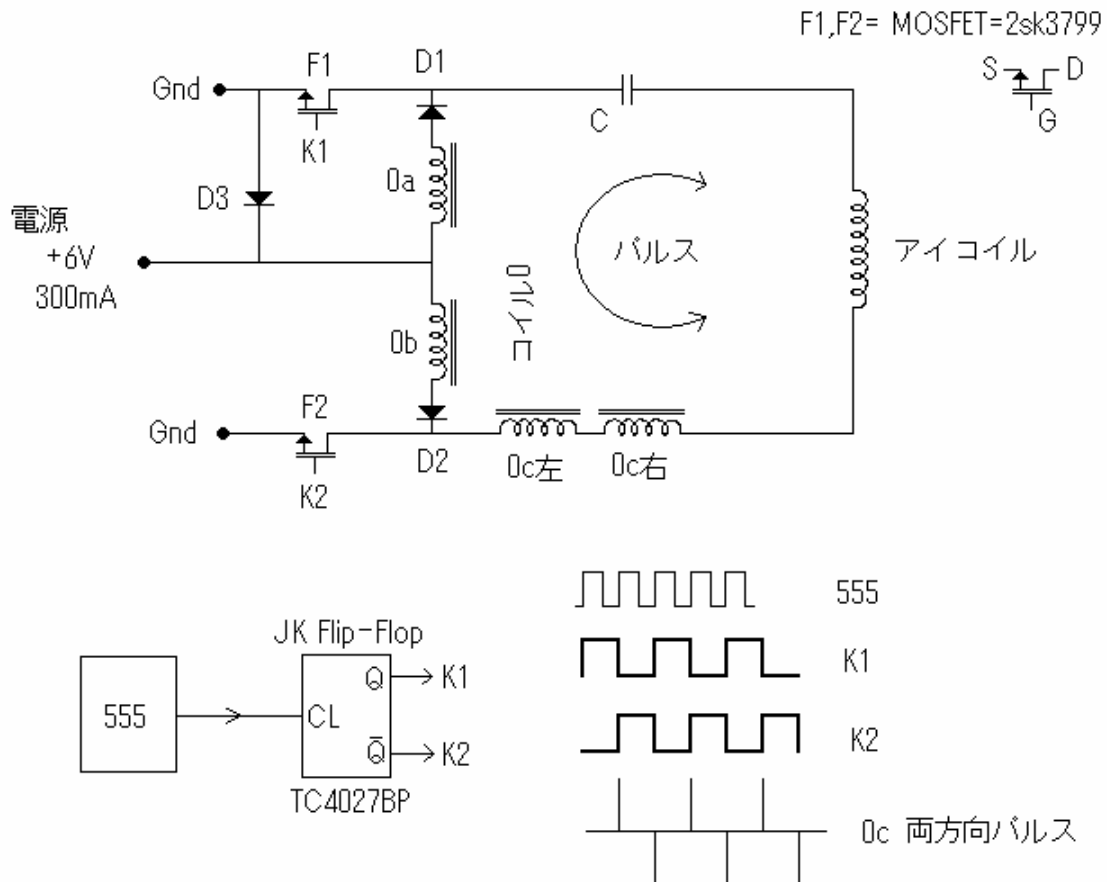
結局、アバウトな解釈で、

…気=ヒッグス粒子

となるだろう。

ここに述べることは、
生体、電子回路、物理学 の3分野に、またがっていて、
理解するのは、容易ではないかもしれないが、
「テレビの仕組みを知らなくても、テレビを見ることはできる」である。
装置を作って、実際に試してみればわかる。

§1 回路



上図のような回路が、必要である。

これは、両方向に、パルス電流を発生させる回路であり、整流ダイオード D1、D2、D3 が重要であって、これが、パルスを強くする。

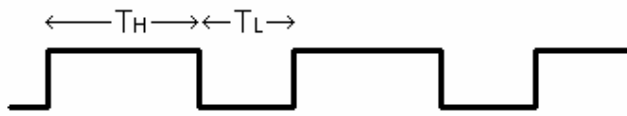
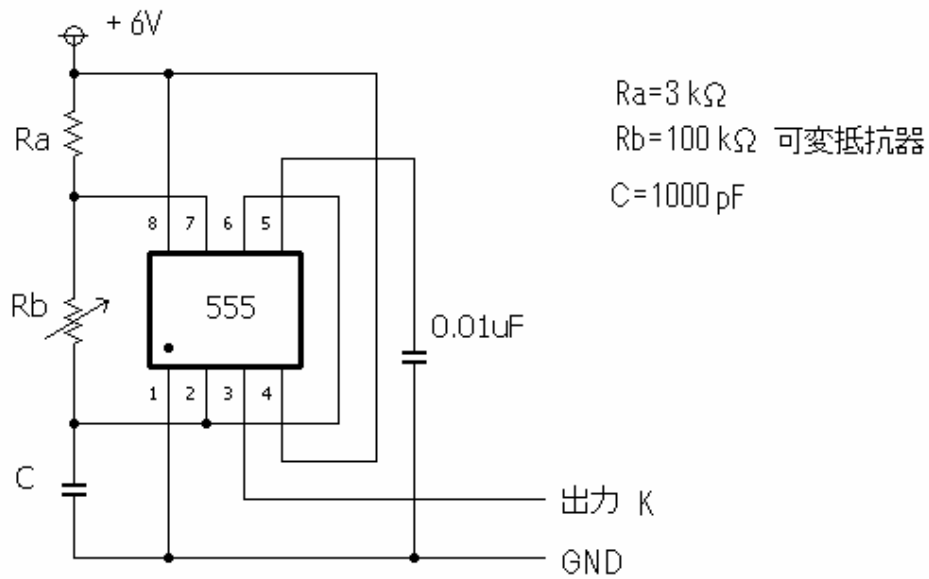
この回路の電流の流れを、頭の中で、シュミレーションしてみるとよい。ちょっとした頭の体操になる、ヒントは、「右上のコンデンサ C を含めてスイッチングし、パルスが D3 をも通る」。

LMC555 から方形波を発生させ、これを JK-FlipFlop に入れる。可変抵抗器によって、555 の周波数を調整する。

電源は、AC アダプター(DC6V 300mA)。右上のコンデンサ C (=0.1 μ F)は、数百 V になるので、高耐圧(630V)のものを用いる。

§ 2 IC...LMC555、TC4027BP

● 555

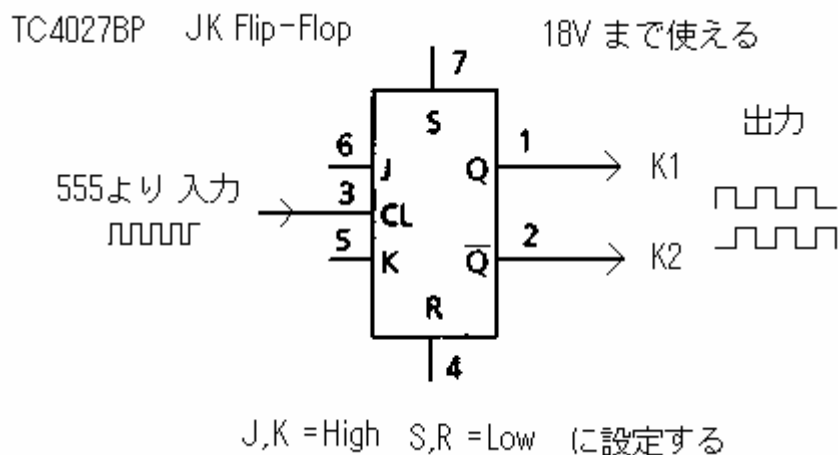


$$T_H = 0.693 \cdot (R_a + R_b) \cdot C \quad T_L = 0.693 \cdot R_b \cdot C$$

$$\text{周波数 } f = 1.44 / (R_a + 2R_b) \cdot C$$

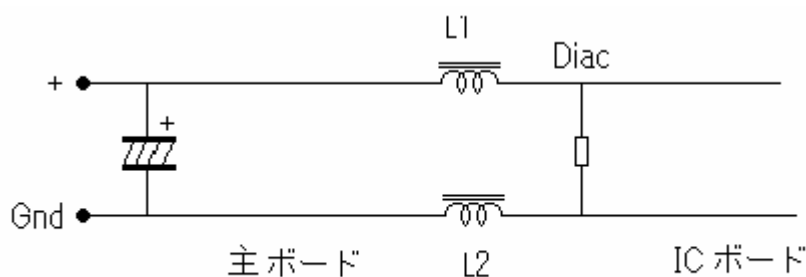
R_b = 可変抵抗器を回して、周波数を変える。

● JK-FlipFlop



●IC 保護

LMC555 や TC4027BP を、鋭いノイズから保護するため、
 下図のように、Diac や、コイル L1,L2 を、主ボードと IC ボードの間に付ける。
 L1,L2 は、市販のトロイダル・コイル(径 3cm ぐらい)を用いた。
 このインダクタンスは、大きい方がよい。

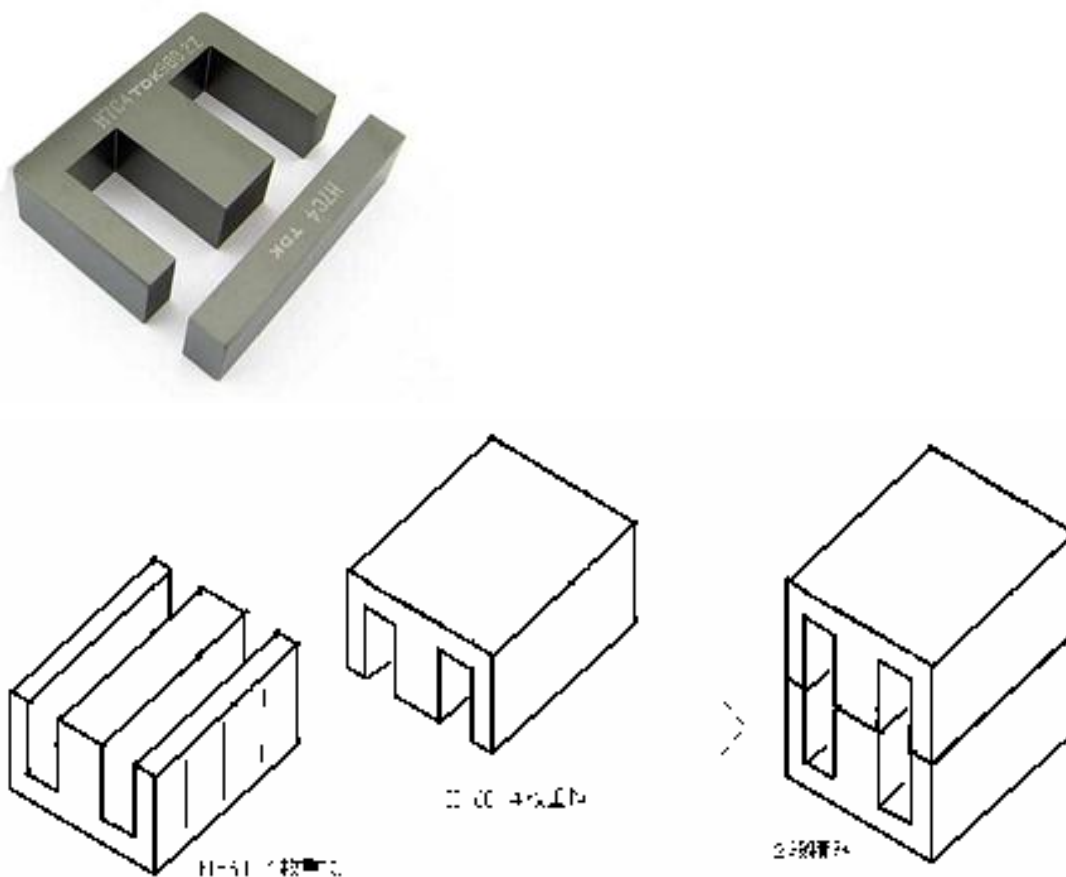


Diac は、背の高いノイズを、32V に切ってしまう。

§3 コイル0 (0a,0b,0c)

コイル0は、強く鋭いパルスを、発生させるために、特に考案・工夫したコイルである。

- コア・・・EI-60 コアを8枚使用



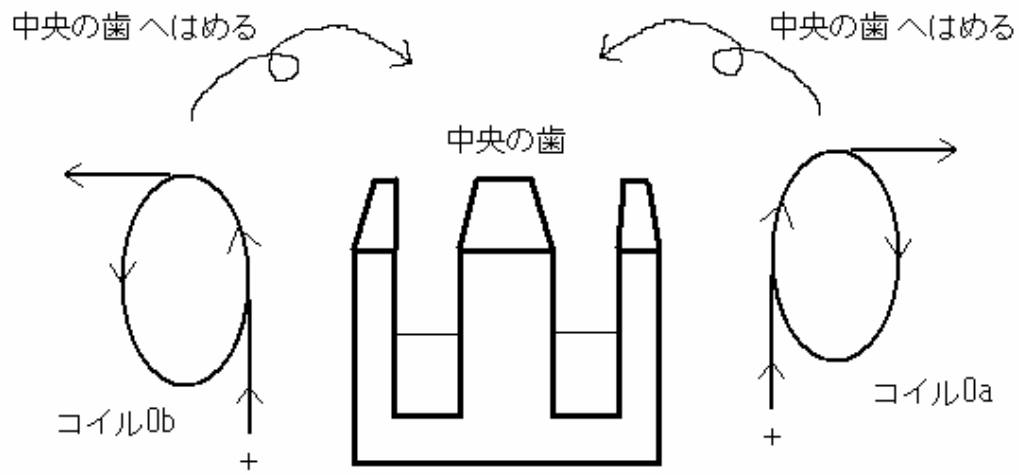
コイル0cの巻数を多くしたいため、EI-60 コアの4枚重ねを2段積みにして、中央の穴を大きく取る。

巻き線は、次の被覆線

- ・・・協和ハーモネット:架橋ポリエチレン電線 KQE 0.5mm
(銅線 0.5mmΦ、外径 1mmΦ)

(皮膜の薄いポリウレタン線などでは、コイル自身に発生するアイ起電力によって、絶縁破壊を起こし、短絡するので、不適當。)

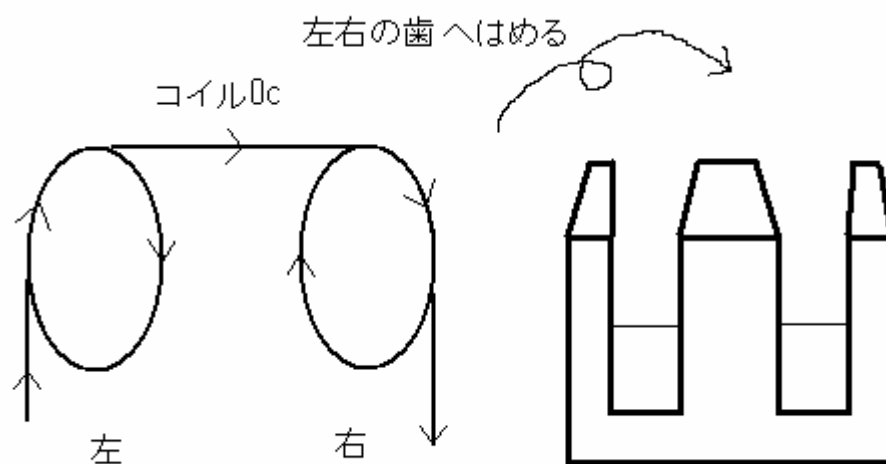
- コイル 0a,0b



0a=30 回巻き、0b=30 回巻き、

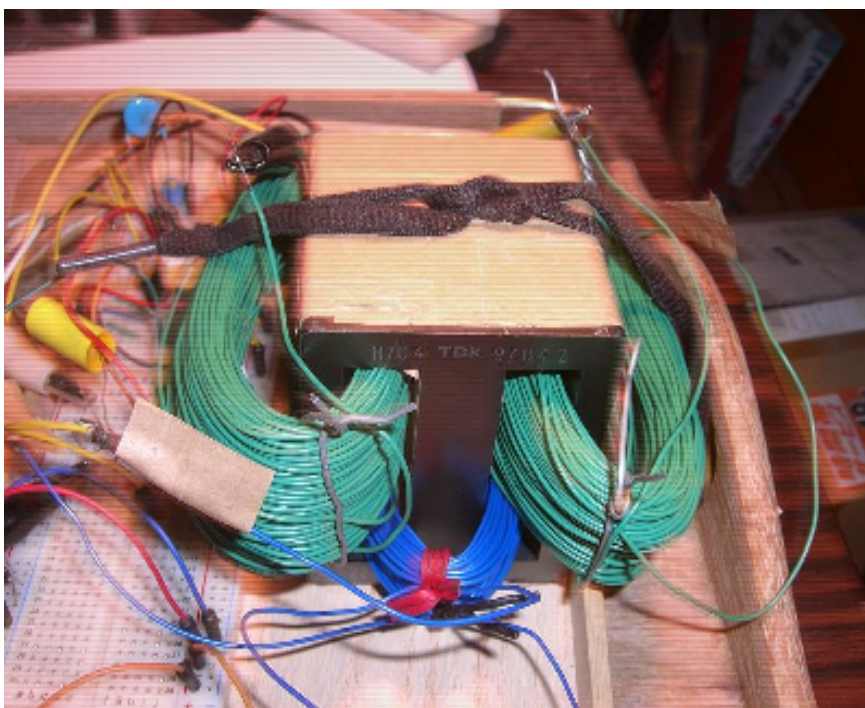
● コイル 0c



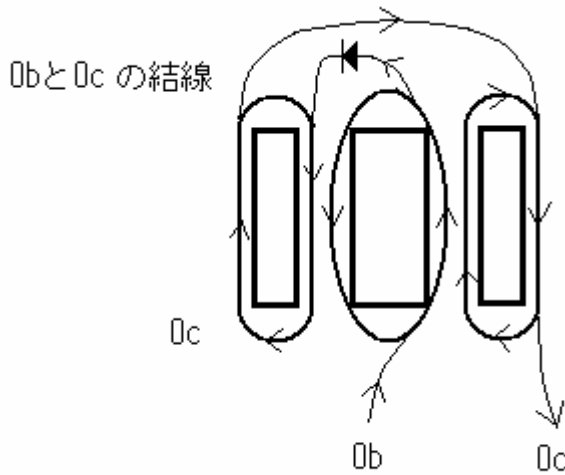


0c の巻数は、左右各々50m(約 270 回巻き)。

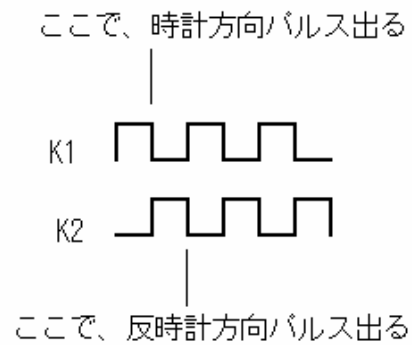
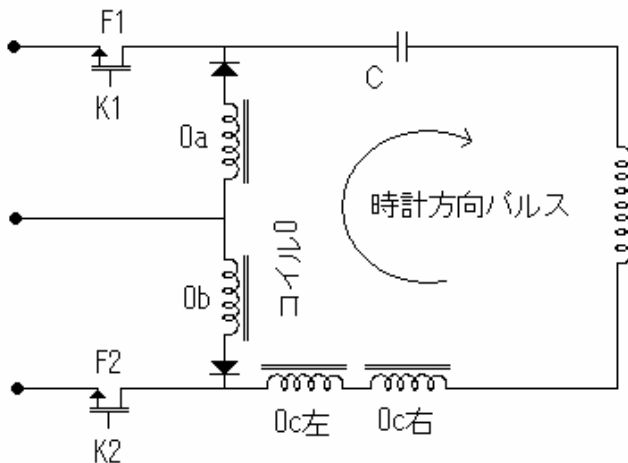
次の写真は、コイル0全景： 青い線が 0a,0b、緑の線が0c。



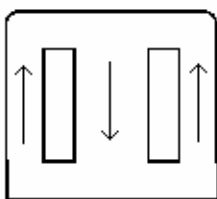
●0bと0cの結線は、巻き方が、互いに逆向になるようにする。



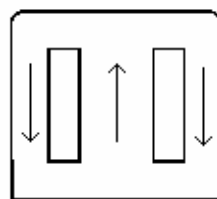
●K1,K2の反転とパルス



K1=ON, K2=OFF
0aの磁束



K1=OFF, K2=ON
0bの磁束

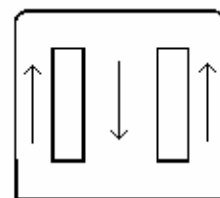


→ 反転

→ 反転

0a,0cパルス発生

K1=ON, K2=OFF
0aの磁束



0b,0cパルス発生

K1,K2の反転 → 0a,0bの磁束が反転 (0cの磁束が反転)

→ コイル0cからパルス電流が発生、アイコイルに入る。

(0a と 0b の磁束は、互いに逆向き)

特に、0c が、左右の2つに分かれているわけは、

0c の左から出る磁束と、0c の右から出る磁束を、

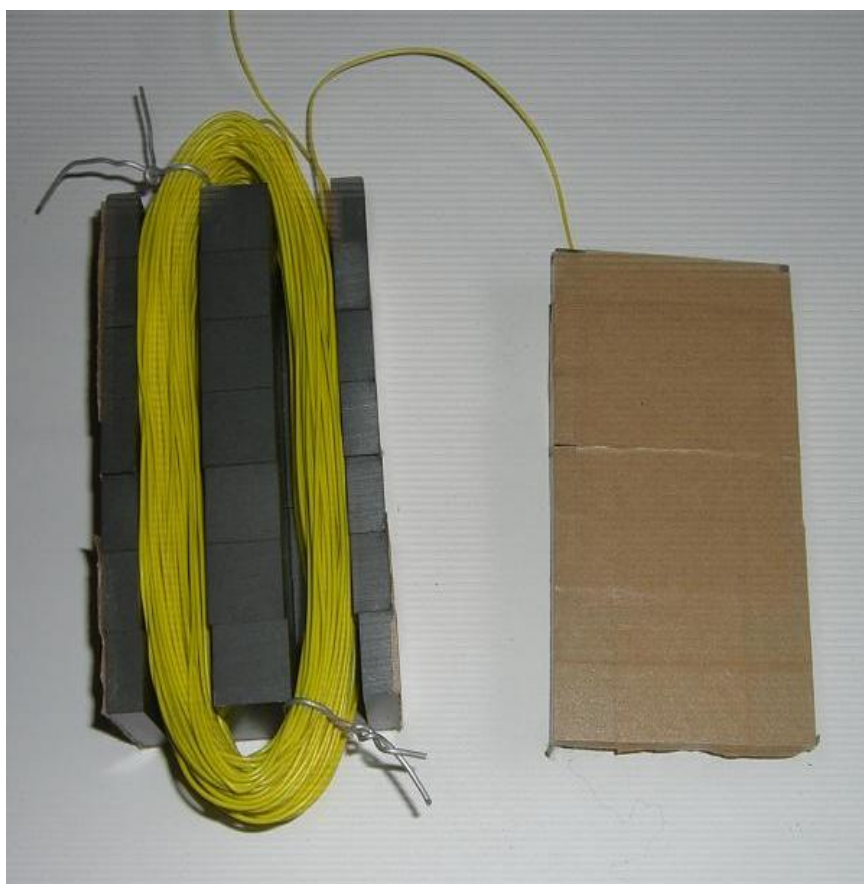
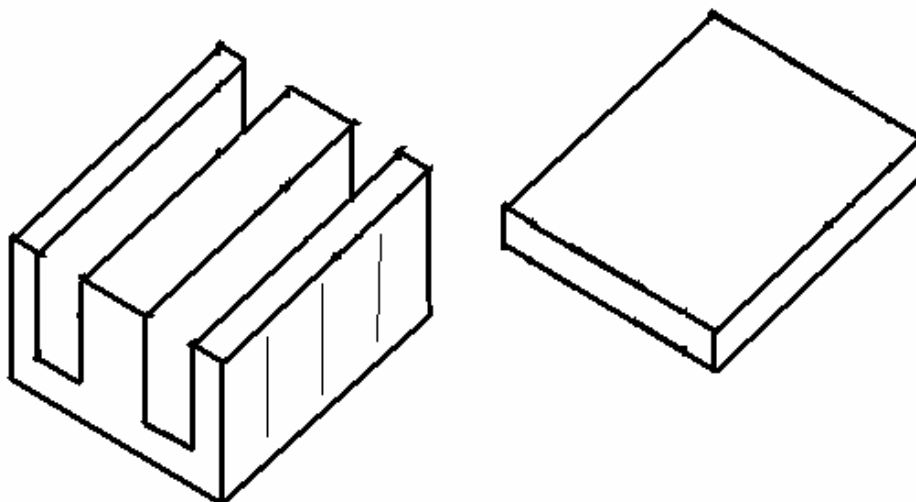
コアの中央で、衝突させるためである。

この衝突に、パルスを強くする効果があるようなのだ。

§4 アイコイル

アイコイルは、気の発生源である。

(アイコイルの‘アイ’は、電磁ポテンシャル A_i から、取った。)



上の写真のように、EI-60 コアを8枚重ねて、テープなどで固定する。

一方で、次の被覆電線

・・・協和ハーモネット:架橋ポリエチレン電線 KQE 0.5mm

(銅線 0.5mmΦ、外径 1mmΦ)

を 50m、

EI-60×8枚 の溝に、ちょうど入るくらいの輪状に、

何かに巻きつけて、形を作り、

これを写真のように、溝にはめ込み、その上に、

ふたになる、もう一方のコアを被せ、紐などで縛って固定する。

参考写真



●さて、スイッチ ON

555の Rb=可変抵抗器を回して、周波数を調整すると、
コイル0やアイコイルから、ジジジーという振動音が出るが、

この振動音の最も大きいところがよいと考え、そこへ合わせる。

●アイ起電力

巻き数の多いコイルに、強く鋭いパルス状の電流を入力すると、電磁誘導とは別に、ある起電力が、順方向(電流と同じ方向)に生じる。僕は、これを、電磁ポテンシャル A_i による作用と考え、“アイ起電力”と呼んでいる。

アイ起電力のメカニズムについては、現在、次のように考えている。量子電磁気学に、“Dirac の置換え” というのがある。

$$p \rightarrow p - qA$$

p : 電子の運動量、 $-q$: 電子の電荷($q > 0$)、 A : 電磁ポテンシャル

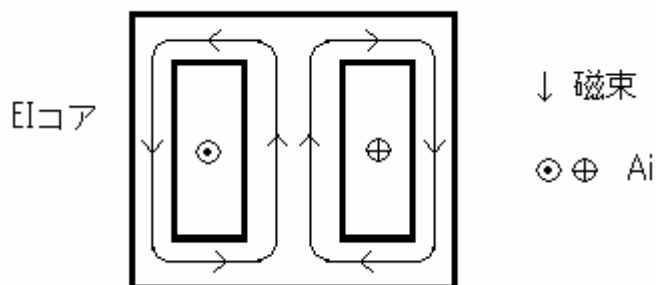
これは、アハラノフ・ボーム効果の理論的導出にも、用いられており、単に形式的なものではなくて、現実に起こるものだと、考えられる。

この式から、電磁ポテンシャル A が存在する場所においては、その向きによっては、電子の運動量は、 $-qA$ 増大する。

これを、コイルの巻き線内の、自由電子に当てはめてみると、まず、そこには、そのコイルの磁束によって作られた、電磁ポテンシャル A がある。

次に、幸運にも、この A は、ちょうど、自由電子の運動量を、増大させる方向になっている。(これは、電磁気学を詳しく調べて、確かめた。)

これによって、自由電子の運動量は増大し、その結果、外からは、起電力が発生したように映る。これが、アイ起電力である。



今の場合、アイコイルには、上図のような磁束が発生、この磁束によって、巻き線には、巻き線と同じ方向に、電磁ポテンシャル A_i が生じる。しかも、EIコア8枚重ねによって、その距離が長く、そのぶんアイ起電力は強くなる。

アイ起電力発生と同時に、同じ場所から気が発生すると考える。実に、このEI型アイコイルによって、「気の発生装置」が確立できたと、僕は自負している。

%注意：巻き線に皮膜の薄い、ポリウレタン線(エナメル線)などを用いると、稼働させたときに、アイコイル内部に発生した強いアイ起電力によって、火花放電を起こして、巻き線が短絡してしまう。

§5 パワーストーンを用いる

アメリカの眠れる賢者“エドガー・ケイシー”は、
パワーストーンなら、“アズライト”がよいと言う。
…アズライトは、チクチクと刺すような気を発する。
確かに、生石なら、そうかもしれないが、アイコイルと共に使用するのなら、
むしろ、
ラピスラズリ、アメジスト、水晶、などの方がよいだろう。

古代エジプトのファラオの装飾で有名なラピスラズリ、
空海は、ラピスラズリの数珠を持っていたという。
これを手に持って、ジャラジャラやると、そこから気が出る。
古神道に、‘珠振り’という行があるが、これと数珠はよく似ている。

パワーストーンを、アイコイルの上に乗せると、
アイコイルから発生した気が、さらに増幅される。
なぜ、増幅されるのか、物理的なメカニズムは、よくわからないが、
よく、修行僧が手の平に、水晶などを乗せて、瞑想している画などを、
見ることがあるだろう、あれと同じ原理である。

●アメジストの細石

手ごろでよい気が出るので、ここではアメジストとする。
アメジスト(なければ水晶)の細石 1kg を布製の袋に詰めて、
アイコイルの上に乗せる。
(アメジストの細石 1kg は、¥1500 ぐらいで買える)

次の写真で、左の石袋を、右のアイコイルの上に乗せ、
この石袋の上に手を乗せて、使用する。

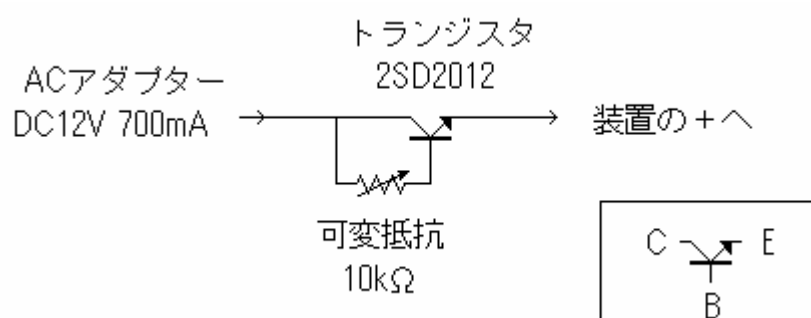


パワーストーンを、アイコイルの上に乗せると、
アイコイルから発生した気が、さらに増幅されるようだ。
なぜ、増幅されるのか、物理的なメカニズムは、わからないが、
よく、修行僧が手の平に、水晶などを乗せて、瞑想している画などを、
見かけることがあるだろう、あれと同じ原理である。

§6 追記

その後、この電源 AC アダプター(DC6V 300mA=0.3A)で、しばらく使ってみたが、その先に可能性が見えたため、もっと強い AC アダプター(DC12V 700mA) に換えた。

ただし、これを直接つなぐと、電流が流れすぎて、電線や FOSFET が、焼ける危険があるので、次のような回路を、入り口に追加し、電流を絞れるようにした。可変抵抗器によって、電流を安全レベルに絞って使う。



2019年7月～2020年2月発行
著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満
Copyright 渡辺 満 2020年